

論文要旨

黒田 洋子

正倉院文書は、類い希なる古代の文書群である。正倉院文書の解明は、歴史科学の手法に基づいて行わなければならない。すなわち客観的な整理作業と、徹底した観察に基づいて、合理的に実証・解明しなければならない。日本史学においては、豊富な伝世史料をもとに培われた厳密なテキスト批判力と、中世古文書学が牽引した様式分類手法等により、客観的な実証・解明が行われている。本論では以上の手法を踏まえて正倉院文書の解明を目指した。第一部には、主に帳簿や文書と言った、公文の分析を中心として行った研究をまとめた。第二部には、主に書状を対象とした研究をまとめた。以下に概要を述べる。

第一部第一章「天平宝字年間の表裏関係から見た伝来の契機」では、関連史料を徹底的に整理した上で、通説となっている福山敏男氏の法華寺阿弥陀浄土院金堂説を再検討した。さらに天平宝字年間における、紙背の利用状況から、天平宝字三年の文書の一部が、造東大寺司から写経所に持ち込まれた異質な文書類であること、天平宝字年間における文書管理を行ったのは、安都雄足ではなく上馬養であること、光明皇后の意向実現の部局として写経事業・造営事業ともに同じ構成員が担当にあたっていることを明らかにした。

同第二章「八世紀における銭貨機能論」・同第三章「布施勘定帳の基礎的分析」では、それぞれ銭用帳・布施勘定帳といった帳簿の分析から研究を行った。第二章においては、銭貨を国家財源・支払い手段として見る通説に対し、交換手段としての機能の解明を目指した。そこでは財源的機能を果たす現物と、交換機能を果たす銭貨の間で、歴然たる機能の相違が見られることや、一方功直銭や布施支給において、価値尺度機能と支払手段としての機能が分離していることから、銭貨に求められた交換手段としての機能を明らかにした。第三章では、六宗の布施勘定帳と呼ばれる五つの帳簿について分析した。これらは当初、僧侶の集団内部で一切経を分担・網羅して作成されたこと、その後写経所に持ち込まれると、經典目録から經典管理帳簿へと、使用目的の異なる帳簿へ性格が転換したことを指摘した。さらに經典目録作成の際には、後写一切経の目録が使用された点が重要であることを指摘した。同第四章「言葉綴る人々 一丸部足人の場合」・附論「仕丁私部広国 一奉写大般若経所注進文に描かれた姿」では、個人にスポットを当てて関連史料を整理し、それに基づいてその動向を考察した。第四章では、官人の周縁部に位置する一運送業者である人物が、官人身分を獲得するまでの動向を探り、その際文筆技術を身につけていることが、一つの契機となり得たこと、さらにそれを希求する身分的周縁階層の存在を指摘した。附論では一通の文書に描かれた仕丁を他の帳簿類から検証し、仕丁の実態を明らかにした。

第二部では書状関係史料の整理に基づいて考察を行った。第二部第一章「「啓」・書状の由来と性格」では、書状の訓読作業に基づいて内容分類を行ったほか、①書式、②用語、③書体、の三つの要素を抽出し、各要素について考察した。その結果、三つの要素のいずれにおいても、書状は公文と根源が異なる

るものであることを指摘した。同第二章「『国家珍宝帳』に見える「王羲之書法廿卷」の性格」では、唐代までの王羲之真蹟の集積過程を整理し、そこから『国家珍宝帳』に見える「王羲之書法廿卷」の性格を考察した。それは、初学者用に構成された草書の手習い箱であり、楷書作品を収めた箱と対になって厨子に収められていたことを指摘した。同第三章「正倉院文書の「啓」・書状に見える書の性格」では、実務官人の書の観察から、奈良時代の書の習得状況を楷・行・草の書体別に考察した。楷・行書体については、王羲之「集字聖教序」の受容が見られること、草書についてはごく一部の官人を除いては受容の痕跡が見られないことを指摘した。さらに前章で明らかにしたことを踏まえて、奈良時代には、草書の定着は見られないことを指摘した。同第四章「正倉院文書の中の「王羲之習書」について」では、奈良時代の王羲之受容の証左とされる史料を逐一検討し、王羲之の書が段階的に受容された状況を述べた。また朝鮮半島由来の古い書法と訣別し、それとは対照的に王羲之の書法を選択したことは、平安時代初頭の草書の受容、ひいては仮名の発生を準備するものであったことを指摘した。

以上に概要を述べた。本論の特質としては、はじめに述べたように、正倉院文書の特質を生かし、徹底整理と観察に基づく合理的な解明を目指した。さらに経済学・国語学・中国史・書道学等の、隣接する諸学問にも多くを学んだ上で解明を進めた。本論が得た成果については、今後正倉院文書や出土木簡の解明に十分貢献できると考える。さらに近年中国において夥しい量の簡牘が出土しているが、これらの解明にも貢献できるところが大きいと考える。